ハワード・ジン「肉声でつづる民衆のアメリカ史」と「訳者あとがき」、そして私

中山　猛（仮名）

最近になって初めて私は街頭の″デモ″なるもの、つまり「反原発」「再稼働反対」なるデモに参列しました。最近、私は少し変わりました。

私は元来、英語・英書一般に興味を持っておりましたが、ある頃、特に自分の好きなジャンル（歴史や超短編）の英書を読み漁っていました。たいして読書通でもないのに、たいして英語がすらすらと読める訳でもないのに、実は特に訳があって英書を手当り次第に読む必要に迫られていた頃でした。2008 年の 12 月頃でした。そこで、いくつかの有名なチョムスキの著書にまつわって、私はハワード・ジンという人を初めて知りました。英語や言語学に興味を持っている者なら、言語学 → チョムスキ → ジン、という具合につながっていくのは自然なことでしょう。

尊敬すべきはハワード・ジン。私はそれ以来この優れた、世界に遍在する人民・草莽の優れた理解者、類稀なる教育者に惹かれ続けて、日常の些事や本職に時間を割かれながらも、片手間ながらも、その発信を、どこかで何となく気になって追い続けていたのでした。氏の著作や活動に影響を受け、この現在世界の中でその一部を、目にも留まらぬ極小さではありましょうが、極小ながらも確実に構成している私、という存在の内奥が、以前より変わっているのがわかります。

読者に感動と勇気を与えずにおかない。それは訳者のいう通りでもありました。そしてそのような私に似た極小の類は世界に増殖しています。

一方、この日本では、ジンの精神が現実の動きとして具体化してゆくのは、今これからが始まりであるといえるでしょう。では、それは日本では、どのように進展して行くのでしょうか。

この日本では政治に多くの者が関心を持てずに唯々諾々としていた時間が、どうやら ″3.11 以降″ はいったんは止んで、人々はより深くものごとを捉える考え方を身につけ始めたように思います。私にはそう思えます。かつて見えなかったものが見え、分からなかったことが分かり、手のつけられない混沌だと例えられがちであったこの現在世界が、混沌なのではなく混沌であるかのように、一部の者たちに都合がいいように、私たちが思い込まされている世界であること、が次第に私たち自身に理解されてきているように思えるのです。

このような理解を得た、私たちのような人民・草莽が世界に何千何万人いることか、そう考えると、『肉声でつづる民衆のアメリカ史』のエピローグに掲げられているパティ・スミスの歌 “PEOPLE HAVE THE POWER” を、いま勇気を持って改めて、力強く口ずさむことが出来るのです。

ハワード・ジン亡き今、そしてそのアメリカ “合州国” ではなくこの日本で、この訳書『肉声でつづる民衆のアメリカ史』や訳者「あとがき」は、浅学でかつ英書読みに達者でもない私たちや、これから先に世直しをしてゆく次代

の者たちにとって、まだ混沌の中に光明を見いだせない人々にとって、身近で手にとりやすい ″勇気の源″、いつでも振り返ってみることのできる ″力の泉″ になることでしょう。少なくとも私にとっては大きな励ましでした。

なぜなら、「訳者あとがき」にある訳者の願いは、ハワード・ジン本人の願いに同じであるはずだからです。より多くの読者層は日本語で語られてこそ的確に、そして自然に理解が出来ます。だからこの一連のジンの著作が斯様に世界に浸透したのだとすれば、この国に訳書が出る必然性は時間の問題でもあったのかもしれません。

しかしながら、ジンの願いは今や、特にこの日本で、冗漫に望むのではなく早期に実現する必要があります。なぜなら既成のこの国の仕組みは、多くの者たちの声を聞こうとせず、誰も何の責任もとらず、あまつさえ隙あらば“3.11 以前” と同じように万事を進めていきたい、そのように指向しているからです。つまりこの国は ″3.11 以降″ が未だに全く何も収束していないのです。

“3.11 以降”の世をそれ以前の元の位置に収めようとする勢力に対して、ジンに学んだ力を発揮することが、Zinn Readers には求められます。次代に責任を果たすために、次代に侮蔑されないために、どうしても必要です。

そしてこの大著を訳了した者と、それを鋭意に読み解いた者たちは、ジンから知恵と勇気を授かっているはずなのです。そのことを訳者も語っている。

ジンをひとたび理解したというならば、言行一致というものが人として信頼され得るために必要とされるものならば、もはや私たちは、次のことを教えられたのだと思います。

「日常の些事にかまけている、生業にとらわれるのみで身動きが取れない、学ぼうとしない、学ぶ時間がない、象牙の塔に篭っているだけ等々――そんなふうに見られてはいけないのだ、なかんずく次代のまだこれから学んでゆく者たちからそのように指弾されては恥ずかしいのだ」

それが、ハワード・ジン自伝の書名 “You can’t be Natural on a Moving Train！“ の意味だと考えます。まさにこの書名のとおり、「激動の時代に中立などありえない」のですから。

この大著を訳了した者と読了した者は、ハワード・ジンの心奥に迫ったはずです。

言い古されているように、私たちのひとりひとりの声も力もみな些末なものです。そして弱者は強者に脅されます。私も常にこの自分の卑小さと恐怖を感じています。私がこのたび訳者に連絡を取ったのも、この自分の心細い心証からゆえだと思います。Zinn Readers はその理解と行動をともにすることができるし、その役目が私たちにはあると思います。

私は今頃になって、こんな歳になってから、はじめて街頭の″反原発″、″再稼働反対″なるデモに参列したのでした。最近、私は少し変わりました。(2012/08/08)